繪本菊慶

へ13
3332
6上

へ 16
3332
6

蓬莱榮

長柄長者

繪本黄鳥墳巻之六

遠州小夜中山麓　栗杖亭鬼卯著

源之助再び死て母に逢ふ話

毛詩曰人而無義何不遄死爰に長柄長者紙打殺大仁村の椽の下に住居せり大仁坊と環を結ぶも二月むりも穴の中にあらず世のさまに伺ひしに長者の跡も娘さへ木忠左衛門殊に頃日は古屋敷に化物出て人の通ふこと稀なりと聞傳へ今は心安しと夜に入て大仁村を立退き少しの名ごりに浪花の西難波島と云所へ引こみて還俗をなし文字屋仁兵衛と改め船頭を業とせり強力に任せ荷物を

平成八年
本大学出版部

仁兵衛

仁兵衛おくゐ
今ハ互ニ疎き
中と成り
常ゐ爭ふ
おくゐ

いとかちぐとうやうくしば所みるも能男ぶりと取持けふ
環も今はおもと名をよく洗濯するとて人仕事しるむしゝ
似ずこうし久り此隣る松原作内が宅あるう北国荷物着せ
折ふしは仁兵衛めるゝ紙なめるて船上するる此作内が家ふ妹せ
いるるのけり年は四十ふ近るるまで風俗しるやらいと物ちがふ
卯月ふ散のるうるる桜の傍るそし侍る此仁兵衛女房おむが
五十もるゝ殊ふ妬ゝ深ふふ今は秋風吹作内が妹ふ心紙
かけ折節は目負めく情紙通いるるゝ此女佛の道ふ深く
心とるせるゝ負めぞ暮しるるおもて仁兵衛が今いるるほし
けふいるるふるふふめく心ひがゝ家長者がるるにけるる時は
紅粉を粧ひ年るう十も若く見えるうるるぐると言よう

かるる雑義の暮しとるるもあの男ふるるるる今かく負
しくかりていつ鏡とるう上し事えるるるるかまと家紙婆ふ
負しの傍のかるるぐ年のつるまるるしと小町が言るんもむべなる我
と急ふ若やるるる心ふるるるるるる浪花ふ頃日丁老児丸と
仙茅紙鬻ふ是と服しるる再び若くるるる仁兵衛ふ執心
るせるる今の恨と晴るんと専ら此茅紙尋しに隣るる作内折
ふ浪花へ出るるるふ此事紙密ふ物語まゝば作内も心ふおる
しくいるるも其茅ふ堺筋るふ所ふるる調るるるせんと受引け
まゝいとるんしく密納金一包取出し人ちまゝ紙調るるまとるの
るるるぐ切るるるる作内常ふかるるるき紙憎く紙図中るふ
茅紙調へ来るるる密ふ言るるる人間五十ふるるれば五十の内生も

此葉は其肉は残らず下し新ふ十七八の肉ふるひ妙葉うり共
肉はくだくだうち甚泻しかたし難義なるべうん君十七八ふ成り
るは少しの苦痛をうへと渡しそれば如ち悦び来今十七
八をうべいうはうくもうくもうくやうん必くくふうもうとと
夫より日毎に蟄園を服しうれば大ふ服痛しかたし誠よ盆城
傾うぶ如く泻しうきびおもい大ふ悦年寄の古肉下る事乃
うもうきいよくく多く服しうふぞ今へ腰をへ立ば一両日
のうちふ百とせの姥と成うきびに年齢いよくく忌きうひ中ま
肉へを寄付ぎおもを心の肉よおうしくれのもを十七八ふうりかれ
ぶ意暴ふ時眼ふうの見せうくふんどいよくく怠慢うう腰用
なしうる此下無話佐々木源之助い不量京九めうう父の敵を

討取母の仇を容易ふ討まぶうふ夜と見ふ後で
泛与惣左ヱ門ゞ館ふ着し君よ別まし翌日かやうくの事
ふうう思ふ京九の里へ来ゑし始終敵を討し事まで落も
なく語ゑうれば与惣左ヱ門手紙打うう感心し足下れ孝心天
ふ通じ也うるく復讐ゆうし事の目出ゑよ佐々木源吾ハ
石川大膳と心を合せ鎌倉宗尊親王の謀叛ふ組しちゆ
うちふ旗上せんと企しふ親王ハ謀叛わうふを京都へ押込
ようりうふより西人薄氷を踏む心地あうゆう家足下ふ
逢し時かまくらの内命を蒙り彼ふ追罰の用意をぞ
備へまうきうし今一応敵の虚実を伺うんと思ふ腹心乃
者をし内身再び姿紙屋つし河内ふ立越猶又石川ふ

も伺ひよう来たるぞ其時即時に退治せん急ぎ立てけり
くるふぞ源之助よろこびは絶えて直ふ淀と打立ゝが去みくも
長柄長者の事殊ふ梅ゞえ苑くる事も慥ゝざれば一先
長者の元へ立寄らんと長柄ふ来たるふ今は長者も人ふ討
き梅ゞえは大仁坊ふ殺さるき其跡も化物屋敷と成るよし
いきき果てけりくるぐ桜木忠太夫が行方を尋んは私が
なり先は石川大膳並ゞ源吾があるゝ由と伺ひんと思ひしゝが
松原作内雑波島ふ住くるよし言ゝて幸ひ彼をと召
具し地利の稼るとも伺ひんと長柄を立出雑波島へ急る
が爰は町家もあるゝにはゞ家居なきはやるくふ里
人のとゝへふ作内が家ふ尋ねけり率ふるゞ作内どの家を

こゝるゝふ来と言入くきはゞ内より女の声みるゝ作内は只今留守を
待る用事あるゝはゞもるゝへ入るゝとりふ呑るゝと言ゝる内もて
見るきは豕母渚なり母は一目見るるりやきるりの源之助や
と取るゝるふいるゝ不審晴ゞ正ゝ母は春日江村ゝ源吾
ふ縊殺さるき水葬なるゝふ此所ふ来るゝ扨はるれと
暮ひるゝ一念の此土ふのこりけるゝんと涙と流ゝさるは
母上いまゞ浮きるるず此土に縄の残るるおりとや父の仇源太
左エ門と遠州京九郎ゝ討るゝ母の敵源吾とも討るゝんと
此所ふ来るゝ追付修羅の亡執ゝしゆゝ与ん成仏
去るゝと念仏申るきはゞ母も涙ふむせび汝家死るゝと思ふ
なり春日江村ゝ縊殺さるき戸板ふのせるゝと此所すぐ流

来りに此家の作内見附て家死散るるものとそいとゞ
内へ入吊ひ弔と首ふ差〳〵縊とゝ仏間ふ直し置るに
いまゞ定業ふ行ぶ為やうまりうて気付るどあと
条なるに蘇生して今ハとやうに成り余所目を憚り
作内が妨と被露し身が敵を討る帰る朝夕祈りし
甲斐ありて再び逢事のうれしさと始終を語るふで
源之助ハ天地を拝し是誠ふ天満神の御利生且ハ宝山北丘
の御情く家母上ふ火葬ふせんといひしふとゞ是ふ水雑の業
を満るゞ〳〵と自水葬ふ成しかるに作内と心を合せ源吾
御対面ヲ上るるのありがたよ今より作内と心を合せ源吾
を亡ぶき謀をうゝとせんと勇立る折節作内も立くと

来ふ尽ぬ物語ヨ長柄長者の事ども詳ふかるるまゝ作内
其義気を感ゞ大膳源吾が枯子ふ伺ひ与惣左エ門どの〳〵
ゝるまでハ必ず身を人ふ考ゝ先西所へ立越面
を考ゝもぬと幸ふ城内までも入込間ふして恭らんと翌日立
出る此夜壁隣ヲ大仁房伺ひ間ふ全く源之助が声ふて
母上なるふゝぞ扱ハ作内が妨と言ハ源之助が母なるやか
く此所ふ居る所ふ行ば是より佐〳〵木源吾ふ成るの隠
居ふ彼近付事かゝるべし女房環ハ幸病気なるまゝ此侭
ふ捨ゆうと夜ふまぎれ〳〵河内へと落行る環も源之助
が声と聞出し大仁ヨ相談せんとるに早少くの銀を懐中
て河国へ行るれバ扱ハ大仁家ふも考ゝ此家ふ立

退しよるを追付きて恨を言んと立出しが頃日の酒宴にて
立ざればニ本の杖にすがりやう〳〵のがれ出行たり

十三郎櫻木忠太夫淀与惣左エ門を祢して話

斯て作内を鴫野大和のやしきに伺ひたるに近頃大膳源吾軍用金を集んと百姓に過役をかけ苛政大きくなれば依て両家の百姓一揆を起し押寄るよし風聞ありければよき時節なりと淀へ馳付右の次第を訴へければ志からば時日を移さ宜しくば源之助をも伴ひ早速出陣あるべしとありければ作内いそぎ立帰りて源之助にいひたりしかば百姓騒動にまぎれて源吾が屋鋪へ忍び入日頃の恨をはらしなく僅の間しばしは与惣左エ門殿の手をかりんは勇気ある志やと此百姓共ハ君命ひあってと聞ハ分骨砕身しても働くべし先鴫野をふせつぶし与惣左エ門殿と一手に成て大膳を責あけんといへばおさんと述ければ源之助大に悦び汝がいふ所金言なり運をもまかする叔父源吾何程のことかあらんいざ打立んと母に暇を乞て出行なりしを勇しき此下不在話淀与惣左エ門も軍勢を催し京海道を打せ既に河内路へさしかかりたる所へ向より白装束したる四人の者先手の勢へ無二無三に切入ければ先手の軍卒大に驚き風に木の葉のちるごとく四方へ乱れて逆退たり与惣左エ門遥に是を見て何者なるぞ狼藉のふるまひ子細を聞ん一人も不残搦取れと真先に進て汝等何の意趣ありてかく狼藉に及ぶ我家ハ石川大膳佐々木源吾が討手

忠太夫
弐代
与惣左エ門と
一敵と移こい
千三郎初め
四人の者
途中ふ
待伏を

とく〳〵鎌倉より上意を蒙り進發するものなり先子細
をのべよと馬上ながら大音に呼はりければ十三郎怒りをなし
やあ此奥なる与惣左エ門先達て三千両の金子を奪取んと
汝が家来を忍ばせ長柄長者を打殺せし事覚あらん我は
聟の十三郎といふもの是なるハ長者が娘さつきが家来忠太夫
親子なり親叔父主君の敵なり尋常に勝負なせと詰かく
されバ与惣左エ門一圓合点ゆかずこハ不思議の事を聞ものかな
長柄長者ハ莫逆の友なるに三千両の用金をこそよく用立
なる程の某何とて長者を害せん定めし人たがひならんと言せもと
果をど忠太夫与惣左エ門が家来の一言證據なれバ事をいふべきぞ
主人を殺し立退曲者を捕へんとするに此品我手にのこる曲者

ハ逃失たり是なるものがひろふやと彼羽折を投出しければ
与惣左エ門とくと見るにいかにも我家来へ着せたる合印の羽折也
去りし忠太夫とくと合点せよ三千両の金奪ひ取らんとならバ
汝もあるべく五百両の礼金をえん其時窮民を救ふ爲しと
長者受納あらざるゆゑ五百両を持かへりしも長柄長者の施行と
と百姓どもへ分ちあたへしなり長者を殺さんとは何ぞ足軽風
情の賤しき者ゆゑのまん此所を得と考へ外に敵のあらん
事を察しられよ理非明白になりけれバ血氣にはやる十三郎
少しも聞入れず我ハ遠国にありて其場の様子を知らね
ども汝が合印を證據なれバ一寸もゆるしがたしいざ潔く勝負
〳〵と詰よる所へあはし〳〵と声をかけ馳来るものあり是雑人

ぞかりきば源之助作内ろう一人の大男ふ縄をうけ息いきたへど
ヤあれ事なり左右方も静てゑ系昨夜百姓一揆の者共
ふまぎれ鴫野の屋鋪へ押かけらいしふ億病第一の叔父源吾一
さへもさへぞ裏門ようり逃失らいき此者一人踏止りて樫の八
角の棒ひろうるだ立ゆゑ大勢取ゑこ終ふ生捕ようり得と見
てれへば大仁坊ようりかまきハ妻梅ゑえが仇ゆゑ首打て本望遂ん
と存りひしゃが大悪僧の大仁長者ゆ殺せ事とも已と口走り罵
いゆへ引立是迄参らとれと妻細ゆゑきば四人の者ハ案ュ相違して
手持ろくひろくろきば与惣左ヱ門大ふろうびさそけうん拷問
して委く白状させよくけらくれば大仁朝矣系いふまぢと思へば
たくゆ貫ゆ挫ぎまくもりへべき者ふけうびさう系もりく出家な

きば懺悔しくう十悪とも少しハ滅せんと思ふゆゑ言聞とそと環
と密通しくく源之助梅ゑえゆ毒殺せんとし梅ゑえふ書ねきと
かをを道ふ待く殺し顕ゆゑゆゑ環緒とも大仁村の穴ふ住
ふ千両の金をとらんと来りくれ与惣左ヱ門が足軽酒ふゑ前
後もきぐうゆ羽折と奪取恐び入しふ金をけうび長者声
立しゆゑ碁盤をりて打殺し忠大夫系と捕へんとすると
幸彼ふ羽折とけうく置ゆ与惣左ヱ門ふゆり首尾能仕課きが
恨らくハ金ゆ取ぎるゆゑ次弟ふ貪窮ふ成しが環が嫉妬深
きふ俤し折くく隣へ源之助帰りくゆゑ驚鴫野へ逃行ば吾
とるのひとへども大億病の愚人ゆくうえもさうえば大騒かゑ
逃行しく系も大勢と打破くう落失んと思ひしが運尽て捕ハ

与三左ヱ門が
こしぶふ随ひ
人〻寄〻大仁
坊を殺ひ
十三郎
源七助
ちゝ木
賀代
忠太夫
大仁坊

淀与惣左衛門
作内

もこれハ天命なり早く殺さるべし殺せしまもせば罵つるう
与惣左エ門立寄りて汝潔く懺悔せーもの我先世の罪と一
つ〳〵滅さべし第一大恩ある長者の許ゑ居〳〵出家の身と
して環と蜜通せし罪を十の指ゑ切金しとなりくれば忠矣
立寄りて十指ゑ不残切落を毒殺せんとせし罪を腹をたく
べし畏く腹へ突通を梅がえゑ殺せし罪ハ源之助急所ゑ
よけ〳〵咽と突べしとなるゑ源之助立寄胸のなるゑ突通す
扨長者ゑ碁盤めく打殺せし罪ハ各石ゑりく頭と打割
金しと差図なるハ十三郎さて未なるゑ有なる石ゑる終ゑ
天窓を打割なり因果の程〳〵ぞなれ与惣左エ門勇立
是よりそれ大和へ立越石川大膳佐〳〵木源吾と亡さんと源之助

十三郎作内忠大夫諸も大和へ急なり

石川大膳滅亡佐〳〵木源吾が話

斯〳〵浚与惣左エ門ハ四人の勇士ゑ先ゑとなせ大和路へかゝる
けるゑ所へ苛政ゑなるし百姓ども大膳源吾と亡さと国傳へ
そこかしこより集りて来るゑ凡千人ばかり勇さんかなる此
事大和へ聞えしかば石川大膳今ハ叶ハしと覚悟と極め防戦の
用意とせしなるこば欲ゑ遣ひ〳〵加なし仮武者なれば大軍ゑ
きゝ伝へと聞〳〵ねけるくと逃去りて今ハ二百人ゑ過ざりなるもど
不敵の大膳ちつも驚ども花く敷打死せんと其夜ハ諸卒ゑ
暇ゑの盃ゑせどやと自大盃ゑ汲受数盃とかゝつけなるゑ源吾
ゑ日頃好なる酒も咽と通らず只青ざる〳〵居なるゑ大膳

大膳主従死と
きくや乱酒ゐ醉
耶と俄ふ源吾
意赤交じて大膳
の疝首と討
源吾

石川大膳
前

大ゐ恥しめ士らる者死をべき時ゐ死ざれば死ゐ増る恥辱いと
足下宇多源氏の末流なるぞや家も石川次良左エ門が嫡孫
家期の酒宴不興ぐしたうまるとなりくるふいろ酒の勢代
かるんも思ひくんを受く呑々るべ大膳も数盃傾け翌と
うけるべ討死せんと一間へ入るる源吾もいて酔ふ伏々るがつく
ぐと思ひ廻るよりるる百年の命と討死をべきあるべしや
恩ゆる大膳ゐぐる家命ゆをかくぐる寝首とる門をひるき
る降参をるふをうとるるる大膳が寝間へ忍び入べ大膳ハ
霄の酒ゐ前後もるらべ霹靂のごき大鼾して伏々る源吾
さる足して首水もたまるべ打ゆるる憐むべし大膳大強勇
の者るるるど天命のぐる所るる終ゐ源吾ゲ一刀ゐ冥鬼と成る失

いるる夫るる源吾ハるゆるる夜の明るゆ待るる追手の門を開
きを惣左エ門が陣前ゐ来る大膳が首と出る降参と呼るるけ
まべを惣左エ門大法るるべ源吾を搦め首実検るるゐ大膳ゐ相違
いるるべ勝ぐれ三度上追手の方へるゆ寄るべまるる城ゐ仮
武者ども何くゆるるるるべ右往左往ゐ裏門より逃出し
無人城とるるるるべ手負も濡るべを惣左エ門本丸へ入百姓と梅
育る扶源吾ゲ引出る大恩の大膳が寝首とる命と惜む
人非人諸人の見せるめ首とる祭るる怒る所へ人の僧忽然と
入来る勝軍と賀る家を則河内の国宝山北丘ゆる此者源
死ゐ當るるるべども億病の愚人殊ゐ降参を殺るるゐ義
軍ゐあるべ年来佐る木家るる由緒ある家るるべ愚徳

お預けをられんと事を紀し給へ演べられば与惣左エ門理を伏し
貴僧の詞尤なり助ぐべき者なれども未だ〻頼母敷し
鎌倉へ言上の〻いかもはるかに隔たれば源之助を
出家母と盛て殺し系図の一巻と奪ひ去り不道人汝と
恨る事久し假令助命ばかりとも やすやすとべきと息巻て
罵ること久しければ北丘又仰せ給ふ汝が母定業なれば蘇生せしうへは
ちかう〻恨を晴さんとて系図の一巻を取返さるべ助く歟
汝系図は何国か置し有やらん白状せば愚僧が命と
や受得させんとなりしかば源吾悦く家河内と立退時太切
のあれば庭の石垣穿ち密かに埋け置き源之助一命やゆす
ふおつ〻へ河内か隠し置し所をもらせんと与惣左エ門も打笑ひ

かつて愚人何程の事を仕出さん源之助彼と伴ひ河内へ急ぐ
歟しとなりしかば北丘も大ふるひ皆と河内へ急がれば与惣
左エ門は軍勢を引上淀の城へぞ帰りける

佐々木長柄の両家再興ぶす墳の由来河内の
姥が火の話

去程に源之助十三郎宝山北丘作内忠太夫源吾と引立鳴埜
の古屋鋪へ立帰りしかば百姓ども家中〻じと門前に市をなし
ちらぶる事限なし此時源吾言〻へ家正し〻源之助が
叔父と〻へ頃日近威を振ひし身の多くれ百姓どもの見る前
おいまし〻の仇受人事いとぐうう恥し何とぞ暫く繕ひ給ひ
一巻の有所自身ふもらんと涙をやくり上られば十三郎源

之助おいふやこの彼昨日すぐ
威と震ひしを面目なく
思ふる断つて家彼を付添ひ取逃と事
なしいまもとやるされとゆるふ源之助も
尤と同じ傳とゆるしさんび系図の有所
案内せしべしと五人と落も坐鋪に入
なるべ源吾椽側を立出此石の下をあ
堀出しなとりふ何心なく刀式椽の上よ
抜れかの石式揚んとする所と源吾ハ源之助
う刀式抜手も見さび意趣覚えしと切付る
源之助ちうさびの石ゆるゆ丁と受きば石火ゑど

走つて石の片側切割しう此時不思義成
哉石の割し所より水勢美上る事龍吐水
とりう水と上るごとし十三郎ハ兼て心得
し事なれば源吾が刀ぬきとう庭へ投落し
なれば作内ちうさび取く伏再びうし上る比丘
手式打く宣ふやう家先年考へ置し水魚石是
なり石中ハ水気と色と殺ちる事ハうさび去ふ依て
水雑の相あるゆきうり今石中の水気殺し
再び水雑ハうべうしび其石玉匠ふ命じて製く時うい
雌雄の不滅魚石中ハ水ハ則玉石なりと詳ふ述
うへハ各比丘の先見と感じうり扨彼土中と穿て系図

源之助系図の
一巻取返し天
うゝ上る思ひと
あり長者一族
の人〳〵倶ともに
こぶ此時水難の
因縁つゝ〳〵
源之助日ふ
幸人
忠大夫
源之助
作内
源吉
宝山比丘
十三郎

の巻物箱に納めいろいろ喜び悦事限りなし夫より十三郎と
忠大夫と伴い長柄へ帰り地中に埋め置し金銀財宝を取
出し京都より八重親子を呼寄再び長者の跡に次日々栄
え殊に医術に妙を得て諸人を療じ一銭の謝物を受ず
施し多れば近国あまね生茱師と敬ひ多く猶も九重が追福の
為長柄川の上に渡し場を構へ諸人の往来を助しかば此渡を
十三郎の渡しと呼る今の十三の渡し是なり源之助も系図
旭丸の釵揃いしかへ源吾沢但乗物ふのせ淀与惣左エ門に与へ
叛逆人退治の赴上聞に達しかば北条時宗公源之助が孝心
を感じ家督相違なく石川大膳が舊領を新に下しかの源吾
を旧悪ゆゑ遠ざけと終に首源を移さるる淀与惣左エ門に

此度の恩賞として摂州島上島下の両郡を加恩に下されかば
時の面目身にあまり急ぎ帰国し与惣左エ門媒として桜木
を向へとりかれば母浦ろ悦び大いに千代万代とちぎりかる祭
何国より来りしか唐琴桜木が居間に飛込かれば源之助大に不
審し此篤遠江すぐに家跡と慕ひ来りしに其後悪人退治に
取紛れ居りしに又も来りしのうれしさよ桜木も姉梅を
と思ひ大切に養へべしと又竜に入り大切に養ひしに不思議や其
後に音沢殺りるのみ二月ばかりに死きに源之助夫婦
夫に歎き誠に鳥類とても家親の仇を報ずるまで守護しかる
嬉しかりし夫婦長柄へ骨の亡骸を持行梅が塚の前へ埋め
石塔を建厚く葬りし其夜の夢に梅が枕辺に来て家因

縁うすく非命ふ死るゝとも吊ひのかりがるも物利天へ生
じ給ひし唐琴が霊も此土より留まるべき先日ふを此塚ゑ
初音ふ供養しゝべし疑ひうゝとゝるとゝ思へゝ夢ゝ覚まり
今も賀塚ふ元日ふを初音聞ゆゝ言傳へゝ源之助十三郎
も刻ふ縁うゝく姉ふ娶ゝ事因縁うゝべし其頃何者ゝ
ゝうゝ人長者が門前ふ一首の狂哥ゝゝ置り

故も源之助を佐ゝ米源太九兵門と名乗民と撫育ゝ名べ
河内大和大ふ納ゝ太平ふ諷々ゝ妻ふ河内平岡の民祈出け
ゝゝ頃日平岡明神の社燈夜毎ふ早ゝ消ゆゆゑ不審ふ存
心を付ゝ處姥一人油陶ふ持来ゝ常燈の油ゝ盗ゝゝゆゑ様

置百姓ども一統うの姥ゝ捕へゝかゝゝ盗賊ハ先例ゆて生
ゝゝゝ土中へ埋ゝ此度も先規ゝ通ゝゝゝゝ度旨訴出ゝ
ゆゑ松原作内検使ゝゝ平岡へ差越ゝゝふ寂早ゝ土中ふ
埋ゝゝ作内立寄見ゝゝゝ長者が後妻
環ゝ作内ゝ見ゝゝ大ふ怒り汝我を欺ゝ丁老児丸ゝ号
潟茱ふゝ俄ふ老ゝ増し剰大仁我を嫌ゝ出奔ゝ終ふ
汝ふ為ふ殺ゝゝゝ家ハやゝゝ迎ゝゝゝども一銭の貯
ゝゝゝ夜毎ふ明神の油ゝ盗ゝ是ゝ責ゝ露命ゝ繋
ゝふ運尽ゝ百姓ども見出ゝ石詰の刑ふ逢ふ元ふ
ゝゝ汝が年寄ふなゝゝゝ生ゝ死ゝ恨ゝゝ
ゝゝゝ眼色ゝ作内ふ白眼ゝゝ作内嘲ゝ

作内

環なく
神燈の油
を盗む百姓
はつまりて活埋
の刑に行る
作内

汝長者の妻〻〻す出家と密通し養女夫と殺させ其罪
いつふ暇る〻是汝がるとと罪ふ行〻どや殊ふ勿体ふも明神の
常夜燈の油とぬと〻百姓どもの手ふ〻〻生るが〻埋らく〻ハ
いつ〻〻う有が〻〻と思ふ歟きふ却〻家を恨を何〻すぞや但し
公へ訴へ牛裂の刑ふ行ふんや返答せ〻〻白眼返せバ此時姥ひの
と叫んぐう詞る〻時刻うきバ百姓ども終ふ石誥の法ふぞ行ひ
る此亡灵今ふ而夜〻を出る〻〻〻〻〻河内の姥ゲ
火と言傳ふ此環ゲ
ふ右の趣をかう〻れバ
能ぞえかひし
環をとり
執念おそかり〻る
夫より作内を
立〻り源之助

来〻〻るハ家仮ふも親と成〻〻バ成敗ふし
かが〻〻百姓の先例わ〻めまバ長者が家の悪
名も出ひ甚妙計〻〻と夫より忠太夫が娘を
代と作内ふ娶せ両家共久〻〻く栄え〻〻〻ふ
目出度けり
水魚石ハ玉匠ふ命ゲ磨せ〻ふ白玉のくちに
二足の魚ゲり将軍惟康親王怒せ〻〻ひ
鎌倉おゲり高時入道滅亡の節足利家
渡り室町焔焼る失〻と言傳ふ

繪本黄鳥墳巻之六終

遠州日阪　栗杖亭鬼卵編

摂都　石田玉山画

同　峰岸戚蔵倣書

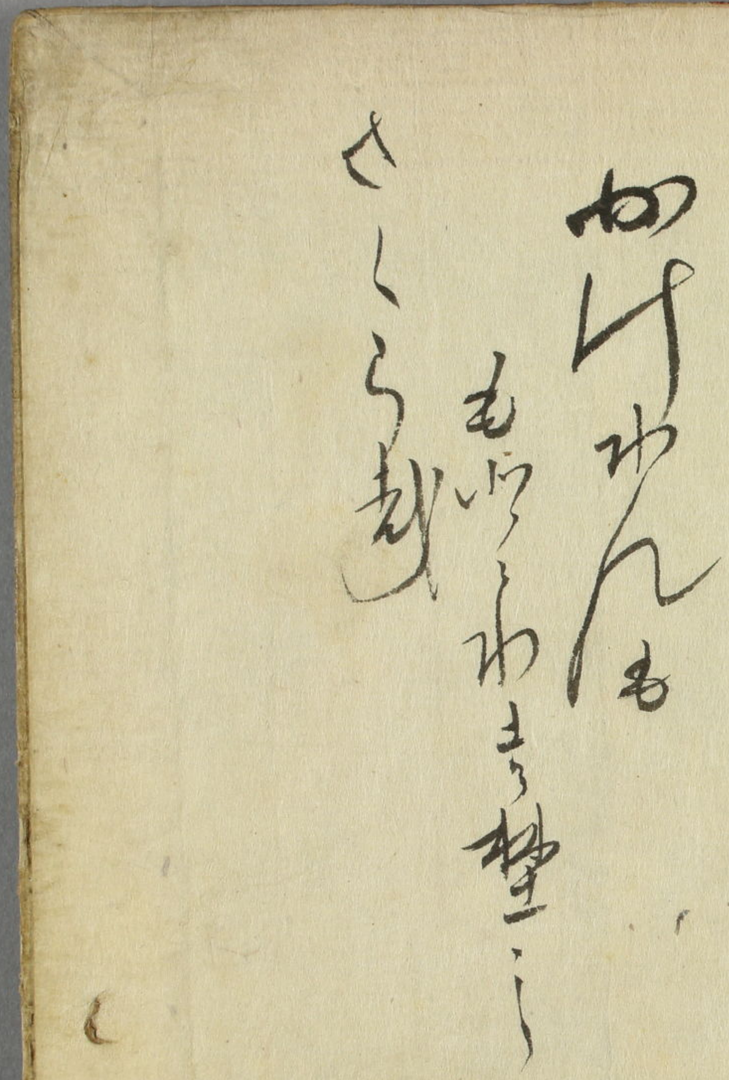
京都　剞劂人　井上治兵衛

浄瑠璃松虫墳　全六冊

骨繼重寶記　平安時代療治本　小本一冊

山中庚之助　男婦全傳　全五冊

珍術萬寶全書　人物誌・宝の書・類聚集　全六冊

繪本長我部物語　全六冊

庚申靈符三教秘録　全二冊